

# 早期英語教育における音声教育のあり方

—五つの事例から言えること—

大 高 博 美

## 1. はじめに

英語教育に長いあいだ携わっていると、英語の発音に並外れた才能をもつ秀才(天才?)に稀に出会うことがある。筆者の場合、そのような学生に過去21年間で7回出会っているので、遭遇の頻度はおおよそ3年に一人といったところであろうか。ここで注意したいのは、彼らが留学はおろか英語圏への旅行もそれまでにいっさい経験していないという点である。にも拘わらず、彼らはアメリカ人やイギリス人並みに英語を正確に発音することができる<sup>1)</sup>。また、彼らの音素識別能力に関しても、筆者が実施した音素識別能力検査の結果から、平均値より有意に高いことが判明している。彼らは、音韻単位としての音素が聞き取れる(つまり聞き分けられる)からこそ正確に発音もできるのである。

筆者は、外国語の音声面でこのような稀に見る才能を持つ者に長い間関心を寄せてきた。彼らに共通するものが何なのか知りたかったからである。当初、彼らは一種の天才のように筆者の目には映った。音楽家に代表されるように、音の世界には

---

1) 厳密に言えば、彼らの発音は英語のネイティブスピーカーのものと100パーセント同じというわけではない。またその完成度は人によって異なる(特に個々の音素の習得度)。しかし、聞いたときの全体の印象として彼らの英語の発音は文句なしにすばらしい。それは、まずリズムが完璧で、弱化や同化などの音変化も無意識裡に習得されているからである。要するに、彼らは英語の音声をも母国語である日本語のそれと完全に切り話して発音できるのである。

天才がしばしば現れるからである。しかし長年かけてデータを取るうちに、優れた音声能力は、必ずしも天才的な音感によってのみもたらされるわけではなく、合理的な学習によっても獲得可能であるということが分かってきた。

本稿の目的は、国内に居ながらにして並外れた英語発音能力を持つに至った7人の場合の事例を基に、上述の「合理的な外国語音声学習」のあり方を考えることにある。今後、小学校での早期英語教育がますます盛んになることが予想される中で、その教育のあり方に一石を投じたいと思うからである。

## 2. 調査の内容

彼ら（男2名、女5名<sup>2)</sup>との面談やアンケート調査を通して明らかにしたかったのは以下の3点である。

- (1) いつから、誰に、そしてどのようにして英語を学習したのか。特に、発音が上達した理由として本人が一番に何を挙げるだろうか。
- (2) 小学校、中学校、高校、大学の各段階における英語への関心度、および各段階で採った具体的学習方法。これらを知ることにより、幼少期に獲得された発音能力がどのようにして成人期まで維持されたのかをある程度推察することができる。
- (3) 幼少期にピアノや声楽等の音楽の習い事をしていたかどうか。これは、彼らの発音能力獲得が音楽経験と関係しているかどうかを推察するためである。音楽能力の高い者は外国語の習得が早いという報告があり (McGee1991 : Llorca1992)、これが正しければ、彼らは皆それまでに音楽の訓練を受けている可能性も考えられる。そしてこの場合、彼らの並外れた英語発音能力の獲得は、早期音楽教育によってもたらされた可能性が高いということになる。

---

2) この男女比率は、サンプル数が少ないので断定は出来ないにしても、外国語発音の習得においては女性優位であることを示している。興味深い結果であるが、本稿ではこれ以上立ち入らない。扱うには難し過ぎる問題だからである。

つまり、音楽を通して習得した音感能力は外国語の発音能力にプラスに転移し得る可能性があるということである。

以下は、被験者全7名のデータを5つの事例に分類したものである。特筆すべきは、最初の4名(事例1～4)は早期に英語学習を始めているが、残りの3名(事例5)はいずれも中学校から英語学習を開始しているという点である。

### 3. 事例1

N(女)が筆者の担当する英語クラスを受講したのは、大学2年生のときである。彼女のスピーキング能力は当初さほど高くなかったために会話練習時には気づかなかったのだが、テキストを読むときになると彼女のずば抜けた英語発音能力が光った。あまりのネイティブスピーカー並みの発音(アメリカ英語)に、周りの学友は最後まで彼女が帰国子女だと信じていたほどである。確かに、このような正確な発音能力を獲得している学生はたいていの場合帰国生徒なのであるが、彼女の場合は事情が違った。後で分かったことなのだが、彼女はそれまでに一度も国外へ出たことがなかったのである。彼女によれば、彼女の英語の発音が上達したのは、3～4歳の頃に買い与えられた英語学習用おもちゃ(カードに英単語のスペルが絵とともに載っていて、機械にそれを入れると自動的に発音される)に夢中になったからであるという。彼女はそのおもちゃで遊ぶのが大好きで、幼稚園に入ってからずっと遊びつづけたとのことである。また小学校(私立)から英語の授業があったので英語教育に熱心な母親が英語教材(テープ)をたくさん買って来て、その結果、ネイティブスピーカーの英語をテープを通してよく聞いたという。尚、英語に対する関心度に関して彼女は、子供の時から現在に至るまで一貫してかなり高かったと自己評価している。ちなみに高校3年時に英検2級に合格している。

## 4. 事例2

次に紹介する者は、幼稚園時代に英語の漫画をテレビで見るのが好きだったという女子学生Hである。彼女の親も英語教育には熱心で、当時アメリカに住んでいた親戚に頼んであちらのアニメ漫画をビデオに録画してもらい定期的に日本に送ってもらったとのことである。更に、日本ですでにニケ国語放送されていたセサミストリートの番組なども欠かさず英語で見ていたという。彼女によれば、意味を100パーセント理解することはもちろんできなかったが、番組のキャラクターの動きがスピーディーでおもしろく、ただ見ているだけでも飽きることがなかったのだそうだ。尚、彼女の場合も小学校（私立）から英語を始めている。

彼女は中学校に入ってから、送ってもらったビデオでたまたまアメリカのポップス番組を見たことが契機となり、英語のポップスに興味を持つようになった。初めのうちは聞くだけだったが、子供のときからピアノを習っていたこともあり、次第に自分の弾くピアノに合わせて自分でも歌ってみたくなったのだそうだ。そしてその結果、彼女によれば、なるべく上手に英語で歌えるようになると努力しているうちに自然と英語の発音がよくなったのだという。尚、英語に対する関心度に關しては、彼女の場合も同様に幼少期から一貫して高かったと自己評価している。

## 5. 事例3

次に紹介するO（男）は、英語の発音能力ばかりでなく、ある程度の会話能力も身に付けており、その点では特異な存在である。事実、大学2年の時点で英検準1級に合格している。この学生の親も英語教育には熱心で、その結果、彼は幼稚園の年少から小学校3年までの5年間（週2回）近くの英語スクールに通い、主にネイティブスピーカーの先生から英語を習った。先生はしばしば代わったそうだが、どれも愉快的な先生たちだったということでスクールに通うのは楽しかったそうだ。小学4年からは塾の勉強が忙しくなり英語の勉強は止めてしまうが、中学（私立）に

入ってからは週に1度ネイティブスピーカーの先生（アメリカ人）から英語を習う機会に恵まれた。

## 6. 事例4

4番目に紹介するK（女）の場合、英語の教師は当時英語スクールの講師であった母親である。母親はかつて学生時代に1年間イギリス留学を経験している。そんなわけで、彼女は幼稚園の年中の頃から、母親の下で英語の英才教育を受けたのである。彼女によれば、母親の英語の発音はなかなかのものであったそうだが、レッスンにはネイティブスピーカーによる録音テープもよく使用されたという。Kの英語の発音がイギリス式よりもアメリカ式に近いのは、おそらく、レッスンで使用した学習テープの内容がアメリカ英語中心のものであったからなのであろう。彼女によれば、当初は母親から受ける英語学習に消極的だったけれど、小学4年の時に母親の友人のイギリス人がK宅に子連れでホームステイに訪れたことを契機にして、英語は関心の対象が変わったのだという。尚、母親による英語レッスンは、小学1, 2年の頃には定期的に続けられたが、それ以外では一時休止がかなり頻繁だったそうである。また、中学に入ってから母親にレッスンを受けることはなくなったが、英語への関心はそれ以降も消失せず、高校2年の時には近くの英会話スクール（週2回の内1回はネイティブスピーカーの先生による授業）に1年間通ったという。

## 7. 事例5

残りの3名（男1人、女2人）は、興味深いことに、いずれも早期英語教育とは無縁であった。いずれも英語学習は中学に入ってから始めており、英語のネイティブスピーカーの発音を聞いたのも中学に入って購入した学習教材（テープ）を通してのみである。誰に教わるでもなく独力で英語の発音法を習得したのであるから、彼らは一種の「天才」と呼ばれるに相応しい者たちなのかもしれない。そのせいか、

彼らは皆なぜ自分の英語発音がかくもうまくなったかについて自覚がない。「分からない」、「特に理由はない」というのが回答であった。特筆すべき点と言えば、先の事例にも共通して見られたことだが、彼らの英語学習意欲（態度）は有意に高いということくらいである。彼らが言うには、英語の発音に関しては中学時代からなぜか他の者よりうまかったのでいつも先生に誉められ、その結果、ネイティブスピーカーの発音を真似るのが好きになったのだという。一人は、「授業中に当てられて英語を読むと周りの学友に驚かれたので、それが面白かった」と述べている。このことは、彼らが自分のずば抜けた英語発音能力を早くから自覚していたことを意味するのだが、この自覚が彼らの発音学習意欲を高め音声習得を促進したのではないかと考えられる。実際、3人とも、英語教材のテープをリスニング対策としてだけでなく、「ネイティブスピーカーのように発音したくて」繰り返し聞いたと答えている。

## 結論

先の事例中1～4に関して特筆すべき点は4つある。まず1つ目は、学習開始時期に個人差はあるにしても、いずれもネイティブスピーカーによる英語音声を一時期かなり集中して（つまりその期間は定期的に）英語を聞いたという経験をもっている点である。次に、その英語学習を始めた動機が、多くの場合、英語教育に熱心な親からの強制が契機となっている点である。これは、当たり前と言えば当たり前のことなのだが、示唆するところは意味深い。すなわち、一般に、高度な英語発音能力の獲得は学習者の意志と独力のみではいかんともし難いということで、この点は英語圏での発音能力獲得の場合とは根本的に異なる。3つ目は、彼らの英語学習はたとえ途中で（特に小学校中・高学年で）中断されようとも、彼らの英語への関心は総じて全時期を通して高かったという点である<sup>3)</sup>。最後の4つ目は、上の「英

3) このことは、二つの質問「中学、高校では英語はどの程度好きでしたか」と「現在の大学時代ではいかがですか」に対して「大好き」と回答していることから伺える。尚、ここで「英

語に対する関心」が持続した結果、彼らは中学、高校時代の英語学習においても市販の学習教材（当時はほとんどがテープによるものだった）を大いに利用し、その結果、英語のネイティブスピーカーによる音声を長期に亘って聞きつけたという点である（しかし、残念なことに、現在の能力を獲得するために合計でどのくらいの学習時間が必要だったのかについては、未解明のままである）。

上の4点が日本の早期英語教育のために示唆することは多い。まず、少なくとも英語の音声教育に関しては、やり方次第では成果が十分に期待できるということである。それには、英語教育をできるだけ早い時期に、つまり幼稚園から（あるいは遅くとも小学2年までに<sup>4)</sup>）開始する必要があるということになる。それも、英語のネイティブスピーカーによる音声を中心としたリスニング教育が不可欠である。逆を言えば、小学校中・高学年からの英語教育や邦人教師の発話による英語音声を中心としたリスニング教育では、英語音声教育面での成果はさほど期待できぬということである。確かに事例5は中学からの英語学習でもやり方によっては目的を達成し得ることを示唆するが、既に述べたように彼らは一種の外国語音声学習の天才と見なしてもよい者たちであるから、早期英語教育のあり方を考える上でさほど参考にはならない。

次に言えるのは、たとえ上述のような理想的早期英語教育を実践したとしても、それが一時的なものでしかなければ、学習者全員の発音をネイティブスピーカー並に上達させることは考えにくいということである。早期に獲得した言語能力は、使われることがなければすぐに忘れ去られるものだからである。子供は言語習得が得意だが、忘れるのも得意なのである。よって早期英語教育を成功させるには、前述の事例1から4の成功例で言えば親の役目に相当するもの、もしくは工夫（すなわち学習者に英語学習を継続させる上で原動力となるもの）がカリキュラム上ぜひ必

---

語への関心が高い」とは、「英語が話せるようになりたい」と同義である。

- 4) アメリカの心理学者 E. H. Leneberg は、移民に対する言語調査の結果「母国語話者と同じように英語を流暢に話せるようになるには、少なくとも13歳までにアメリカに移住することが最大の条件だ」と述べているという（『早期英語教育の必要性－中学からでは遅すぎる－』P.17）。

要である<sup>5)</sup>。

最後に、早期音楽教育と外国語発音能力に相関関係があるか否かの件だが、7名中5名までが幼少期から音楽の習い事を続けていたということが判明した（ピアノ3名、バイオリン1名、声楽1名）。7名中5名というこの数字（比率）だけをもってすれば、統計学的には、有意な相関関係がありそうだということになる<sup>6)</sup>。「音楽を聞くのは好きか」との問いには全員が、そして「英語の歌をよく聞くか」との問いには4人が「イエス」と答えている点も見逃せない。

末筆ながら、筆者は、本稿を通して早期英語教育の必要性を最も訴えたかったのではない。ただ、早期英語教育は適当な方法でさえなされれば、少なくとも音声教育面では十分な成果を上げ得る（すなわち対象が幼少期の者であればリスニング中心の音声教育でも発音教育はできる）ということ、事例を通して知らせたかったのである。

#### 参考文献

- 樋口忠彦・三清一郎（1997）「小学生時代に英語を学習した生徒としなかった生徒の比較研究」樋口忠彦他編『小学校からの外国語教育』第3部第1章研究社出版 pp.116-126.
- 三島出・八十木裕幸（1984）『早期英語教育の必要性—中学からでは遅すぎる—』英宝社
- Llorca, R. (1992) "The role of musical memory in the perception of a foreign language," *Revue de Phonetique Appliauee* 102, pp.45-68.
- McGee, S. Shambes (1991) *Musical Aptitude and Phonological Spelling Strategies among Reading Proficient Adults with Spelling Disabilities*, PhD dissertation, Michigan State University.

---

5) この意味で、小学校の英語教育は正規の一教科と位置付けられるべきなのかもしれない。英語が成績のつく科目の一つとなれば、生徒の英語学習意欲は必然的に高まるからである。

6) しかし、なぜそうなのかという問いには依然答えられていない。これを究明することは今後の課題である。